

# 『大石兵六夢物語』の新出写本二種

伊牟田 經久

【要旨】鹿児島の古典文学『大石兵六夢物語』の現存する八種の写本については、前に調査・考察の結果を報告した（『大石兵六夢物語』の写本Ⅱ一九九四年）が、新たに二種の写本が架蔵に帰したので、新出写本についての報告と前稿の見直しを行う。

まず、架蔵A本（本文は前稿で分類した乙類本）は、挿絵に見るべきものがあるので、大石兵六物語（絵巻）や他の写本の挿絵と比較した結果を報告する。

次に、架蔵B本の本文を他の写本と校合した結果に基づいて考察し、次の諸点を明らかにする。①架蔵B本の本文は、前半部は乙類本系、後半部は甲類本系、という混成本文であること、②前稿では、毛利家旧蔵本が古い形を伝える本（甲類本）、他の七本はそれを基に修訂・増益した本（乙類本）、と結論したが、架蔵B本の出現によって、毛利家旧蔵本は後の補修・改編が加えられており、純粹に古い形を伝えたものとは言えなくなつたこと、③毛利家旧蔵本と新出の架蔵B本とを比較し再建される本文を甲類本と認めるべきであること、④架蔵B本が混成本文となつた理由としては三つが考えられること。

キーワード…大石兵六夢物語、本文の修訂・増益、本文の混成、本文の再建

## はじめに

鹿児島 の 古典文学として名高い『大石兵六夢物語』の写本については、以前にも報告したことがある（以下「前稿」<sup>〔註〕</sup>という）。そこでは、管見に入った写本八種を検討し、甲類本（毛利家旧蔵本）と乙類本（東京大学史料編纂所本、鹿児島県立図書館蔵の五本、およびセイカ食品株式会社本の計七本）に分類し、比較・考察して、「甲類本が古く、それを基に修訂し増益したのが乙類本である」と結論づけた。

その後、はからずも二種の写本を入手できた。一つは平成九年九月に舒文堂河島書店から購入した本（以下「架蔵A本」と呼ぶ）、今一つは平成十一年二月に琳琅閣書店から購入した本（以下「架蔵B本」と呼ぶ）である。本稿は、この新出本二種について報告するとともに、前稿の失考を改めようとするものである。

## 一 「架蔵A本」について

袋綴じ、縦二七種、横一九・四種。表紙（表裏とも）を欠く。一丁表はやや黒くすすけており、他の丁にもしみや水を含んだ跡がある。七九丁。一面二一行、一行二五字前後で書く。挿絵あり。天明四年十一月の奥書があるが、東大史料編纂所蔵本やセイカ食品蔵本などと同じで、元の本にあったもの。書写年・書写者ともに不明であるが、江戸時代後期のものと思われる。本文は乙類本の系統であるが、かなりの誤写があり、本文の傍らに補訂や異文の書き入れが多数見られる。

この本の特色は、挿入された絵にある。精巧に描かれ、彩色された絵が、二三場面ある（〔図一〕に二つ場面の絵をあげる）。一場面を丁の裏と表の見開きに描くのを原則とするが、吉野村の庄屋に追われる場面は見開き二つ、後の兵

〔 図 1 〕 架蔵A本の挿絵から



(牛わく丸に吞まれそうになる)



(心岳寺の和尚に助けられる)

〔図2〕『大石兵六夢物語』の写本の挿絵―「二才たちの評定」の場面―



(架蔵A本)



(毛利家旧蔵本)



(セイカ食品本)



(嘉永六年本)



(明治二十三年本)



(書写年不明本)

六の帰還（七七丁の表）と友達の出迎えの場面（七七丁の裏から七八丁の裏まで）は二丁続けており、すべて二十四丁分ということになる。

【大石兵六夢物語】は、それより前に成立した【大石兵六物語】という絵巻（注2）の主人公と話の筋（構成・展開）を受け継ぎ（場所や登場する化け物は異なる）、文学的潤色を加えて新たな物語としたもので、若年層を対象とする、娯楽性の強い作品である。従って、場面や登場する化け物を印象づけるために、当初から絵を伴っていたものであろう（「自序」にも「側らに自画を添へ侍れば」とある）。

【大石兵六夢物語】の現存する写本の中で最も古い形を伝えるのは、毛利正直自筆本として毛利家に伝来してきた写本（寄贈されて尚古集成館が現蔵。以下「毛利本」と略称）であるが、現存本の絵は一八場面、各挿話（章段）の終わりに入れるのを原則としていたと推測される。ただし、この本は伝来の過程で乱れたところがあり、絵も一部脱落があると見られるので、架蔵A本の挿絵を「絵巻」と対照し、描かれた場面を整理すると、表のようになる。

兵六物語（絵巻）の絵	架蔵A本の挿絵	章段
二才たちの評定	二才たちの評定	①
兵六の出立（幣を担ぐ） 狐たち	兵六の出立（握り飯を肩に） 狐たちの作戦会議	②
（妖怪たち） 宇蛇 養婆上 三つ眼猿猿 ぬらりひよん 頬紅太郎 てれめんちつべい とつくはう ぬつべつぼう	（化け物たち） 茨木童子 重富一眼坊 茶屋女の抜け首 三つ眼旧猿坊 くらま小坊主 ぬつべつ坊 牛わく丸 山辺赤蟹 大女に出会う →山姥となり追ってくる	③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪
狐を捕らえる 父に教戒され放す	父・兵部左衛門	⑫
狐を追う 女二人を捕らえる	お菊を押え込む	⑬
武士に追いかける	吉野村の庄屋に追われる 和尚に助けられる	⑭
頭を剃られる 狐たち笑い踊る	頭を剃られる 狐たち笑い踊る	⑮
地蔵六体	二体の地蔵 二匹の狐をしとめる	⑯
二匹の狐を担いで帰る 友達の出迎え 祝宴	狐を担いで帰る 友達の出迎え	⑰

どこまでを一場面と見るか明確にしえないところもあるが、「絵巻」一二場面、架蔵A本二三場面と認定した。登場する化け物は相違し、話の内容も全く同じではないが、大きな筋の展開は類似しているので、挿入される絵の場面もまた類似性の強いものとなっている。

表の中にある「①」～「⑰」は章段（物語中の出来事や出現する化け物によって分けた十七の話を用いる）である。これを見ると、架蔵A本の絵は各章段の一つを原則とするが、場面の転換のある章段（②⑪⑭⑮⑯⑰）には二つの絵が挿入されている。

他の写本もほぼ同じ場面を取り上げるが、架蔵A本と異なる点を摘記してみよう。（参考までに六写本の「二才たちの評定」の場面を〔図2〕に示す）

毛利本Ⅱ下絵ふうの絵。自画像を含めて一八場面。⑦⑧の絵は一部を欠くか。最後の⑰に絵がないのは脱落であろう。

鹿児島県立図書館蔵・嘉永六年書写本（以下「嘉永本」と略称）Ⅱ自画像と最後の祝宴の場面を含めて二五場面。

鹿児島県立図書館蔵・書写年不明本Ⅱ二〇場面。出立・狐をしとめる・帰還・出迎えの四場面がなく、祝宴の場面がある。

鹿児島県立図書館蔵・明治二十三年本Ⅱ二七場面。自画像あり。場面を特定できない絵もある。本文は嘉永本の写しで罫紙に書くが、絵は白紙に描き挿入する（順序を誤って綴じた所もある）。「明治二十四年二月日 雲遊軒勝廣画」と記す。巧みな絵。

セイカ食品株式会社蔵本Ⅱ絵の数は少なく一〇場面。章段の後に白紙を綴じたままの所がある。絵を描く予定であったが、未完に終わったのであろう。前半の場面の絵は精巧であるが、後半は異なる画家によるものか。

なお、明治以降の刊本のうち、明治十八年刊の麿城館本（伊加倉某訂文改画）は二三場面、昭和四年刊の巧芸社本（村瀬宜得校註并画）は二二場面である。

## 二 「架蔵B本」について

袋綴じ、縦二六・五糎、横一九・四糎。虫損・手ずれのあるものを裏打ちするが、補修後の虫損もある。表紙（黒色）は補修時のものと思われるが、題箋は落剥している。本文は六九丁。一面一〇行、一行二〇字前後で書く。挿絵はないが、章段の終わりに「此間絵あり」と書くところがある。元禄十三年正月の奥書があるが、嘉永本（奥書の後に「嘉永六年丑二月宮里氏」と記す）とはほぼ同じで、年号などは戯れて書いたものであろう。書写年・書写者ともに不明であるが、江戸時代後期のものと思われる。

この本の特色は、本文にある。写しはやや雑で、単純な誤写も多く含まれているが、本文を細かく検討すると、初めの三〇丁ほどは乙類本の系統、残りは甲類本の系統と認められる。しかし、後半の一部には毛利本とかなり相違するところがあるので、この架蔵B本が新たに見出だされたことよって、毛利本のみを他の写本と区別して甲類本とした前稿は、検討し直す必要が出てきたのである。

まず架蔵B本と毛利本ならびに乙類本との本文を比較し、章段ごとに注目される相違点を取り上げ（例の引用は代表的なものにとどめる）、問題となるところを明らかにしたい。なお、各写本は略称（架蔵B本ⅡB、毛利本Ⅱ毛、乙類本Ⅱ乙）を用い、引用文には適宜句読点や濁点を付す。

## 1 架蔵B本と乙類本

「自序」他本との間に本文の大きな差異はない。強いてあげれば次のようなもの（B・乙の例をあげ、他本と対比する）。毛利本は「自序」という見出しもなく、巻末に加えている。後から補ったものか。

・教にもとづけり（毛・嘉永本||教なり）

・みへ侍らず（毛||見得ず）

・退にもまた（毛||退に）

〔①二才たちの評定〕毛利本と乙類本との差異は小さい。架蔵B本は、次の例（B・乙の例をあげ、毛と対比）でもわかるように、乙類本に近い。ただし、「また平維茂も同所において化物を平らげたり」の一行を脱している。

・所なし（毛||所なし。なかなか我が党の力に及ばず）

・木綿は高し、夜は長し、衣はうすし、片そぎの紙子の羽織のり気もなく（毛||木綿は高し、衣はうすし）

・工夫はなし（毛||工夫はなし、斉の晏子と人はいふとも、立ちてはらさんものはそれ只兵六か）

〔②吉野狐の作戦会議〕毛利本と乙類本との本文の差異は大きく、架蔵B本は明らかに乙類本の系統に属す。相違点を整理し、主な例をあげてみよう。

(1) 架蔵B本や乙類本には、次あげるような、毛利本にはない本文がある。増益して整えたものであろう。

・土手の重上げ堀さらへ、四時の普請をこたる事なければ、猫の入るべきすきまもなし。

・其上、兵糧はいなご、す、むし、きりぎりす、雉子の玉子の玉くすり、山のごとくにたくはへあれば、拾年籠る

〈乙には「る」なし〉穴の事をか、ず。

(2) 架蔵B本や乙類本の本文は、毛利本の本文に比べて、改めたり加えたりして整えたところがあると認められる。一例のみあげる。



・しのびの狐をいれ置、夜中の夜廻り七度半、猫に化けねずみにはけさせ、納戸のすみ迄伺はすれば、妹背の中のむつごとより米銭仕繰の密談迄、皆（Bになし）残らず聞届くれば、人の強弱賢不肖、鏡にかけてみるよりはやし。其上分別才覚ある手伝共を扱ひ、棺屋溝筋、洲崎の辺、又は萩原天神山、南泉院の堀のめん、上は新橋射場の下、其外諸所に出みせをはりかけ（毛Ⅱ忍びの狐を差つかはし、荒田、南林、洲崎の辺、南泉院の堀のめん、背はげ狐を軍師と定め、城ヶ谷には高砂狐、其外諸所に出みせをはりかけ）

(3) 架蔵B本や乙類本の本文が、毛利本で本文を見せ消ちにして傍書（例では↓で示す）・書き入れ・貼紙などで示された本文に相当する場合。毛利本から乙類本へと本文が変わっていった様子をうかがわせるものであろう。

・いはんや廟算すくなきをや↓勝算彼にありて敗形我にあり

・牟礼の岡高く↓牟礼の天守をあげ、四方拾里を目の下に見卸し（毛Ⅱ貼紙）

・毛色相違なく↓毛色を相しるしとし、馬と問ば鹿と答へよ、同志喰はなすべからず

・古人も時やすけれ共あやうきをわすれざるを以武備とすといへり。夏の日衣をつくりて寒にそなへ、晴天にから笠を張て雨をまつ。（毛Ⅱ書き入れ）

(4) 架蔵B本・乙類本は、毛利本とは表現が異なる。毛利本の身近で俗な語句表現が、改まったそれになっている。

・人にほこり、おのれを高ぶり、多言にして口舌をつ、しまず、是則かれが禍の門にして、しかも枢機のいましめもなく、耳目の戸ざし嚴重ならざれば、しのびを入るにたよりあり。いはんや、利欲のすきまひろく、色の戸口も常にひらけり。我がともがら、是等のひま／＼より責入、五臓六腑を喰やぶり、恭敬篤実の石垣を踏こぼち、終に明鏡の台を乗りとり、本心の光を奪ぬに（Bは虫損、「に」は乙による）さ、ゆるものは候まじ（毛Ⅱ人をそしり、をのれを高ぶり、もはや鹿兎島に人なしとおもへり。其高慢西田の橋の門よりも高し。是則取入べきの

戸口なり。しかのみならず、利欲の沙汰は日々にいやまし、煙草のけぶりた、ん間はなし。僅十八九才の兵子二才なれども、かくれくゝの色の道もはや千石馬場よりもひろしと聞く。是又何ふべきのすきま、我ともがらの仕合たり)

・いまだ知識もさだまらへBは手ずれ、「さだまら」は乙によるざれば、打にすきまはいかほどもあり。いはんや血気の勇なるをや。先祖内蔵之助などがごとき情のねれたるものにはあらず。向所鉄壁をくだくといふとも、すこしも恐るゝにたらず(毛Ⅱむねに知識もさだまらざれば、打にたよりの有馬の湯、ぬるき男の眼ござし、先祖内蔵之助などがごとき情のねれたるものとはみへず。向ふ所鉄壁をくだくといへども、皆是血気の勇者ときけば、すこしも恐るにたらず)

(5)その他の相違点の主なもの。

・先祖棚唐芋がちの御仏餉、座頭のあたまににぎりめし(毛Ⅱ先祖の飯、座頭の頭ににぎりかため)  
 ・兵法の肝目たり。各右の趣を心頭にさしはさみ(毛Ⅱ兵法の肝目、孫子の七篇只此一句にあり。いづれも若き面々右の趣を心頭にさしはさみ)

〔③茨木童子〕架蔵B本と乙類本はほとんど同じ。毛利本との差異も、次の例でもわかるように、それほど大きくない。  
 ・夢にもしらず、はやり切たる兵六なれば(毛Ⅱ夢にもしらず)

・金札壹両に目がくれ(毛Ⅱ僅かの金札壹両におもてもふらず目がくれて)

## 2 架蔵B本と毛利本(I)

〔④重富一眼坊〕架蔵B本は、初めの三丁ほどは乙類本に近く、後は毛利本に近い。とはいえ、初めの部分の差異は、

次の例（B・乙の例をあげ、毛と対比）に見るように、大きいものではない。

- ・ 白毫の光はならくの底に徹し（毛Ⅱ鈴口の音はならくの底に徹し、白毫のひかりはまたくらやみを照らし給ふ）
- ・ 前句俳諧（毛Ⅱ前句点取）

後の二丁は、独自異文「上筋掛て小指をしめ」はあるが、明らかに毛利本に近い（例はB・毛をあげ、乙と対比）。

・ 雪も降らず、且又さまに逢夜でもなし（乙Ⅱ雪も降らず）

・ あんぼん丹でも参らんか、をく病者へ毛は「臆病虫」には第一の妙薬（乙Ⅱ安本丹でも参らんか）

・ 犬神、山の神（乙Ⅱ犬神、糞壺葉師、一二三四五六地藏）

・ 残りけるこそ奇妙なれ（乙Ⅱ残りけるこそ不思議なれ。ひとへに天狗のだまかしと、人皆舌をふるひけり）

次の章段（⑤）以降の架蔵B本の本文は、毛利本の本文と近い関係にある。従って、この章段は架蔵B本の本文の大きな変わり目ということになる。

「⑤茶屋女の抜け首」架蔵B本は、乙類本に存在する、章段の初めの「生質の勇あり、血気の勇あり、野狐性に近し」の部分（約一八〇字）を欠くなど、毛利本に近い。ただし、脱文（一行分）があり、「この柳のほんたんもち、三寸をりればへその下、底はつくりさとふつば、焼餅ちまんぢう馬のだご」（毛Ⅱ牛の牡丹餅、馬のだご。乙Ⅱ牛の牡丹餅、馬のだご、くされめんざん、かんぢやく餅）、「身をくるしむるこそ、うたてかりけることどもなり」（毛・乙Ⅱ身をくるしむるうたてさよ）という独自異文を持つなど、相違点もある。

先に毛利本との共通点として「生質の勇あり」が欠けていることを指摘したが、実は毛利本はこの部分を別紙に書き、本に挟んでいる。同様の例は、他にも、「恋慕の思ひ」の本文（B・毛）に対する別紙に「恋慕の慕の字、書ておくらん玉章の雁も御鷹場内なれば取るに取られぬさまの袖」（乙も同じ）とあり、また、「おもひこがれし海士小舟、さ

しも齡は和歌の浦、髪の毛しよつと塩風に」の本文（B・毛）に対する別紙に「塩汲替すさかづきの、さしも齡は二拾五の厄にもちかの浦風に」（乙も同じ）とある。他の章段の別紙・貼紙も合わせ考えると、これは毛利本の修訂案であり、後に乙類本の本文となったものと考えてよからう。とすれば、毛利本に近いと認められる架蔵B本の本文もまた『大石兵六夢物語』の原形を伝えるもの（甲類本）と考えてよいであろう。

上記の他、毛利本と同文で乙類本とは異なる例を二つあげてみよう。

・爰は名におふ葛掛原、〈中略〉扱もいつぞやみやよし野、四月四日の御馬追（乙Ⅱ爰は名におふ恋の山、逢はぬをうらむ葛掛原、〈中略〉扱も過にし寅の年、吉野の牧の御馬追）〔図3参照〕

図 3

・不作法な、只には得こそ立せ申さじ（乙Ⅱ無作法な、さてもいな人いな舟のた、のりせんとはどふよくな、すぐにはえこそ立せ申さじ）

〔⑥三つ眼旧猿坊〕この章段も、毛利本に近い。ただし、「無筆の名は隠れはござらん、これこれ」という脱文がある。

・かたちは如猿、声は石火矢、三眼の光り玉、四方八方か、やくとは、うそか誠か（乙Ⅱ頭には白かねの針を植へ、眼には唐金の鏡を掛け、四方八方光り玉、光るといふも偽りのある世なりせば、おのづから、我らごときの化物ま

で時を得顔はちとおかし)

・唐いも盗み、荒田のはまに引あみの(乙Ⅱ唐芋ぬすみ、根掘り葉を引く大根の、名も天道のおそろしき、咎めもげにやあらたなる浜に鵜縄を引網の)

架蔵B本や毛利本(甲類本)の表現をもとにして、修飾を加えたり詳しくしたりしたのが乙類本の表現であると言える(他の章段にも類例は多い)。

〔⑦くらま小坊主〕この章段も、毛利本と同系と認められる。

・妖怪の鬼におそわる、とは、皆はおのがまよひよりぞ苦しむわざなれ(乙Ⅱ妖怪の鬼におそはる。茄子を踏んで暮と驚き、縄切れを見てくちなはかと肝を消すも、皆其おのれの氣騒がしうして、且不足あるが故なり。行くとしてしかも化物ならざらん。心專一にして気丹田におさまらば、何れの所よりか邪気を引かん)

・御峰入のはなむけに(乙Ⅱ御峰入をなさると聞けば、大和ならねど吉野路や、御牧の馬のはなむけに)

〔⑧ぬつべつ坊〕この章段も、毛利本と同系と認められる。

・大石どのに見参せんと、大手を広げて飛か、らんとす。きとく成るかな、兵六は(乙Ⅱ大石殿に見参し、夜討の段の功名漸緩々申承らん。腰拔ずに御物語候へ。掘つらねたる穴かしこ、化生の者とは思ひ給ひそ。ほんに実正狐性院、こんく今夜はくわんく関山大師の開帳、歩みを運ぶ女中方、都て町家の腹ふくれ、猶ふくらかしたぶらかし、人の油の酒盛に、やがて浮名を取着、揚豆腐の代りに貴様の片足御奉加に預り、精進あげを任り、元気を繕ひ申べし。どうぞ給われ、玉子われ、山の芋さへさん薬師、弥陀、如来、観世音、唯我独尊、天と地をさすが御釈迦の誕生のごとく、両手を広げて踊り出れば、此時兵六)〈毛は他に別紙(乙にほぼ同じ)を挟む〉

乙類本の本文は、多くの文飾を加え長文化されている。他にも甲類本にない文を補ったり長文化したりしたところが

あるが、引用は省く。次にあげる章段の結びにも大きな違いがある。

・秋の早田のこづみとは、夜明て後にぞ〔毛は「ぞ」なし〕知られけり〔毛は「たり」〕〔乙Ⅱ跡に鼠の皮衣、取落してぞあるにこそ、是は実正狐性の業と、夜明て後にしられけれ。名句を盗むも猫だまし〕

### 3 架蔵B本と毛利本の差異

〔⑨牛わく丸〕この章段は、長い独自異文があり、注目される。章段の終わりの部分は毛利本と同じであるが、初めから四分の三ほどは大きく異なり、毛利本はむしろ乙類本に近い。毛利本はこの部分を別紙に書いて綴じ込んでおり、脱落後に補ったもの（乙類本に拠るか）であろうと考えられる。とすれば、架蔵B本こそ甲類本の本文を伝えるものということになる。架蔵B本の独自異文の例を毛利本・乙類本と対比してあげる。

- ・生くさき風颯と吹通り（毛・乙Ⅱなまくさき風さつと吹き通り、虚空に鉄火の雨を降らし）
- ・いもおふくはへ、紅ひの舌をひちりめんとはき出し、さながら平氏の赤旗に似たり。何ものならんとおもひし所に、大音上で名乗様（毛・乙Ⅱいも多く生へ、口広ふして鼻とがり、舌長ふして紅の猛火を吐て名乗やう）
- ・一の谷の戦ひになぞらへ、むれの岡より逆落し（毛・乙Ⅱ牟礼の岡より逆落し）
- ・下知し給へば、おそろしなど段の浦、浪とふくくとどつとはげしき夜もすがら、修羅道の時のこそ、矢さけびの音、あら物くしやといふまゝに、能登守教経どのは昔の勇士、大盤石の此大石も、時に取てはが石も同前、命ありての茶飯かけ、死での仏餉何かせんと（毛・乙Ⅱ下知し結へば、兵六十方に行暮て〔毛は「兵六いかでかことふべき」〕〔図4参照〕

これに続く部分は、毛利本と同じ。乙類本と対比して一例のみあげる。

・勇も力もつき弓の、猛き心もかわらけのあぶらつきにはあらね共、如何成るゆへんのむくひにて、かゝる浮目に  
〔乙〕勇も力もつき弓の、居もならず迹もならず、身を苦しめて泣わめく声も枯野のくつは虫、かかる浮目に〔図  
4 参照〕

図4

4 架蔵B本と毛利本(Ⅱ)

〔⑩山辺赤蟹〕この章段は、次に見られるように、毛利本と同系と認められる(B・毛の例をあげ、乙と対比する)。

・足をばひかざらん(乙)足をばひかざらん。おりたつ田子のみづからは、切ても切れず打ても碎けず。若も手向ひ  
するものは、和歌の三神の御罰を罷蒙るべし)

・ゆるすべし。とくに帰て書付おけ（乙Ⅱゆるすべし。熊野の牛王持来たれ）

〔⑪山姥〕この章段も毛利本と同系と認められる。特徴的な例を乙類本と対比して引く。

・粟のかゆ（毛は「湯飯」）でも参らせんと、薪を取に出にけり（乙Ⅱ粟の湯飯でも調べて、御肌をあたため参らせんといふに、やさしきつくね髪、かゝる気色は有明のかげすさまじき山中に、薪をおのがこひ妻木、秋山人なふして独相求れば、伐木丁々として山更にかすかなり）

・今までやさしきおたふくも、忽ち鬼女と成る神の崩れかゝる（乙Ⅱ今までやさしき有様も、いつその程に引替へ、頭には棕呂の皮をいた、き、ひたいには枯木の角を植、悪念妄想の塵積り、忽ち山姥となるかみの崩れかゝる）

〔⑫父・兵部左衛門〕この章段も毛利本と同系。特徴的な例を乙類本と対比して引く。

・忠は桜島より高く、信は前の浜より深し（乙Ⅱ忠は釜山のいたきよりも高く、信は泗川の底よりも深し）  
 ・露をそぼちてはる／＼と、これまで来る親心（乙Ⅱ野辺の篠原ふみしだき、露をそぼちてはる／＼と、是まで来る父が恩愛）

〔⑬美女二人〕毛利本と乙類本とは、本文にかなり大きな相違がある。架蔵B本は、長い独自異文（積るふじやま雪の肌への人穴は身の毛もよだつばかりなれどもさすが大石の手練ほどあつて）と脱文（一行分）はあるが、毛利本と同系と認められる。特徴的な例を乙類本と対比してあげる（『伊勢物語』の歌をもじった部分など）乙類本の大きな特徴であるが、長文にわたるので引用は省く。

・尾ばなのかんざし、木の葉のくし、今時はやりの竹のふし、〈中略〉桃（Bは「丹」と傍記）花の口びる、匂ひ袋のなつかしく、梅と桜の色衣（乙Ⅱ尾花のかんざし、落葉の櫛、よにもうつくし竹のふし、〈中略〉丹花の口びる、いとど匂ひもなつかしの、菊と桔梗の裾ちらし、どちが妹どちが姉）（毛は「にほひ袋の」以下、本文を消して乙



の形を傍書

・今は〈二字、Bになし〉何をかつ、むべき。おきく、おけさと申まして、いふに及ばぬ山そだち、都のはなの色の  
みち、〈中略〉されば〈毛は「さらば」〉子細を語り申さん（乙Ⅱ我も名のある花のたね、ひとりとは桔梗、ひとりは  
菊、皆隠逸の家にかしづかれ、うき世の花の色の道、〈中略〉今は何をか隠すべき）

第一例は、毛利本の傍書が乙類本の本文となつている（同様のケースは前にもあった）が、すぐ後の久米仙に関わる  
本文の傍書は乙類本とは異なる。第二例では女の名の一つが「おけさ」と「桔梗」と異なつてゐるのは大きな相違点。  
これは第一例の着物の柄とも関係がある。

〔⑭庄屋に捕えられる〕毛利本と乙類本とは、本文にかなり大きな相違がある。特に庄屋と和尚の言葉は、乙類本で大  
きな増益がなされていると判断される（次に引用する第二例は和尚の言葉）。架蔵B本は、独自異文（我君よりも給わ  
らん御牧の駒をぬすみ取へ毛・乙Ⅱ御牧の駒のうそくり毛。ただし乙は「うそ月毛」）と二か所の脱文（一行と四行）  
があるが、毛利本と同系と認められる。特徴的な例を乙類本と対比してあげる。

・我も吉野のせなはげが娘、我身其假消ぬ〈毛は「きつね」〉とも、虎狼共鼠とも形をかわし、此繩を唯一かみにか  
み切て（乙Ⅱ我も吉野の霜きつね、寒さ痛さは皆おなじ、我身其ま、鼠とも虎狼ともかたちを変し、心に染ぬ色の  
繩、只一かみにかみ切て）〈毛は一部を消し乙の形を傍書〉

・況や山坂の掛引は一心〈毛は「身」〉の心掛、別而殊勝の至なり（乙Ⅱ其上山坂のかけ引、水練の達者、角力、腕  
押、惣て早業かんどちう業は皆一身の心掛にして、壮士の専ら事とする所、出家の身にさへ別而殊勝に存るなり）

第二例に続いて乙類本は、架蔵B本と毛利本にはない二百字以上の本文を持つ。また、この章段の最後は、乙類本で  
は「心岳寺山にぞ入にけり」で終わるが、架蔵B本・毛利本ならびに嘉永本には、さらに次の文が続いている。

・きのふまでは暴虎馮河の勢ひありしも、捨る時は鼠となり、生をむさぼり命をおしみ、肩をすほめておのれと下り、おもひをこがし胸をいたため、他人をうらむ葛かづら、みづからしめて我身をくるしむ、世間の小人又かくのごとし。是皆心術の正しからざる故なり。患難横逆にあふて終に其節操を失ふ、あさましかりける事共なり。唯君子而已しからず。年寒く（Bは手ずれあり）してはじめて松柏のしほめるにおくる事を（Bは手ずれあり）しるのみ。

〔15〕心岳寺で坊主にされる」この章段も、毛利本と乙類本とは、本文にかなり大きな相違がある。特に初めの心岳寺のさまや禪問答・和尚の説法については、乙類本で大きな増益がなされていると判断される（寺のさまの部分は、毛利本の行間に小字で多くの書き入れがあり、これが乙類本の本文に取り入れられていると思われるが、書き入れには判読困難なところが多い）。架蔵B本は、脱文（一行分）や小さな誤写はあるが、毛利本と同系と認められる。前記以外の特徴的な例から一つだけ、乙類本と対比してあげる。

・和尚も小僧も共（毛は「皆」）狐、寺も座舖もいつの間に、吉野の原の白露と、消へて跡なき浅茅原、虫より外の音もなく（毛は「なし」）野べの松（毛は「秋」）風身にしんで（毛は「しみて」）そられたあたまのひへくと、御牧の駒のふんの上、尻にべつたり赤小豆あれ、だんごころびに臥たりけり（乙II今迄はさしもとふとかりし大和尚、四つ足見せてはらばひ給ひ、九条の袈裟は九つの尾とふりかはる寺の内、小僧も兎も皆狐、おのがさまく）逸うせて、行衛も更に白露の、玉をかざりし宮殿楼閣、花をしきたる釈迦堂まで、朝日に向ふ霜柱、一つ消へ二つ消ゆると見るうちに、一字も残らず倒れ尽して、僅に石ずへの跡かたもなくなり、人もかよはぬ浅茅原、これや狐のふしど、は、始て驚く計なり。只松風の颯々たる声あたまの上にひへくとして、鈴虫の蕭々たる声、どふやら耳のあたり物さびし。ひとり広々たる原頭に眼をひらき、花の波寄る蕎麦はたけ、海と見る目のふかくさよ、霜の早くも打殺さば、か、るうき目は見るまじものをと、打まろび打かへり、茅のむしろの荒男、しほくとして泣くば

かり)

5 架蔵B本と甲類本

〔16〕狐二匹を捕える〕この章段の架蔵B本の本文は、初めの約一丁ほどは毛利本とも乙類本とも異なる（毛利本は乙類本に近い）が、残りの一丁余は毛利本と同系と認められる。実は、毛利本のこの章段の初めの一丁は、乱丁があり数丁後に綴じられている。しかも、この丁の最後が「抜て後ろに」で終わっているにもかかわらず、次に相当する丁が「抜てうしろにかくし」で始まっていることから見て、この丁が脱落していたのを後に補ったものであり、毛利本には問題があると考えられる。

章段の初めの部分の特徴的な例を、毛利本・乙類本と対比してあげる。

・ 狐も今はせんかたなく、地藏菩薩に身を現じ（毛・乙Ⅱ狐も今はせん方や並木の下に走り込み、身をかはすかと思えたり）（乙は「たり」なし）しが、二躰の地藏忽ちに出現し）

・ 定而狐の化物ならんと、ちかく立よりつくくみれば、直に、池田庄左衛門三千俵からいも申請願成就の為建立する者也、とあり（毛・乙Ⅱ是も狐の化身ならんと、近く立寄り、苔を落して）（五字、乙になし）つくくみれば、学者のくせの碑の銘あり。苔を落して能々みれば（十字、毛になし）何の用捨のあらばこそ、直に差付け、池田庄左衛門三千石米申請がため諸（五字、乙になし）願成就是れを奉寄進（六字、乙は「の為に」）建立するもの也、于時永徳元年、本邦世学事、藤原の周信誌、とあり）

これを見ると、架蔵B本が古い形を伝えるもの（甲類本）、毛利本には脱落があり、その部分を修訂した本（乙類本）から補ったもの、と判断せざるを得ない。

章段の後半部は、次に見るように、架蔵B本と毛利本とは同系と認められる（B・毛の例をあげ、乙と対比する）。

・たとへ腹わたづたくくに切やぶりて、其俣に汝が肉を喰ふてもまだあき（二字、毛になし）足らず（乙IIたとへ腹わた切やぶり、汝が肉を喰ふてもまだ足らず）

・夫より狐の輩は、虎の威（毛は「威勢」）をおのづから失ひ、己と肝をひやして遠く退き、小人の道次第にふさがり、文武の門益々開け（乙II大木壱本倒るれば小木千本のなやみにて、夫より狐の輩は、虎の威勢をおのづから失ひ、己と肝を冷して遠く退き、程朱の源ますく深く、徂徠が流れいよく浅くなりて、飛鳥川濁る淵瀬も替れば清く、武士の道中高くなり、町家の溝次第にふさがり）

〔⑰兵六の帰還〕この章段は、⑱とは逆に、初めの一丁ほどは毛利本に近い（一部に独自異文あり）が、後の二丁ほどは毛利本とも乙類本とも異なる（毛利本は乙類本に近い）。毛利本は途中に別紙一枚（初めの「折ふしに」は前の丁の最後と重複）を綴じ込んでいる（後から補ったものであろう）が、それ以降が架蔵B本とは異なるのである。

章段の初めの部分の特徴的な例を、乙類本と対比してあげる。

・夢と覚め、のど筋通らん（毛は「通れば」）いたさをも、はや忘る、は世の習ひ、兵六余りのうれしさに（十字、毛になし）一首の歌をつらねける。あすもまた狐を取るかへらめや茶飯喰ふうへ腰の刀も（四五句、毛は乙類本に同じ）（乙II夢とさめ、煮るや狐の舌の汁、のど筋通ればあつさをも、早忘る、は愚かなる人の心の常のくせ、また一首をぞつらねける。あすもまた狐を取て帰らめやおなじ尻尾を束ね緒にして）

・帰りなん、いざ、鹿児島に、定而人々待つ（毛は「待ながか」）らんと、あたまの上をおしなで、取持児の（乙II帰りなん、いざ、二才共定めて我を待かぬらん。既に心を以て狐の役とす。何ぞ惆悵として独かなしまん。

已往のいさむべからざる事を悟りて、来者の可迫事を知る。実に道にまぐれて夫いまだ遠からず。夕べは夢中にし

て今朝は醒たる事を覚ふなど、いふに是非なき糸鬢の昔の跡をかいなで、見れば、只ひととも残りなく、枯れて尾花の尾もなしや。風のみ寒きほんのくぼ、身にしみくと恥かしけれ。されど式定のしらが首、鬢のかたきは取たれば、少しは腹をすへ風呂思ひ出ても口惜や。よし糞水の我を戒め、此以後は下緒の付鬢神妙に取仕立、いらざる腕立をやめて、親の諫めも菊の花、さすがの者と人にもいはれ、家のほまれ身のほまれ、取持児のゝ

第一例には架蔵B本と毛利本とで異なるところがあるが、どちらが古い形かは判断しがたい。第二例からもわかるように、乙類本は「帰りなんいざ」に引かれて「帰去来の辞」を巧みにもじり、坊主頭の描写を詳しく、兵六の心情を描くなど、大きな増益を加えている。

章段の後半部では、毛利本も乙類本と同じく増益した本文となっており、架蔵B本が古い形を伝えるもの（甲類本）と考えられる。一例だけ引く。

此の道にこそ云ふ人か、あつたも何とかくら  
 ぬえうわふも、あつたも、あつたも、あつたも  
 ぬえうわふも、あつたも、あつたも、あつたも

図 5

・過言差合少々はあるとも、詞をかたるは拙者が持前、嫌ひもし聞捨にして被下ば別而以忝存ると、憚所なく演説すれば「図5参照」（毛・乙）過言差合段々是あり、親にた、り子にた、る事少し（乙は「少々」はあるとも、た、るはもとより狐の持前、言葉にたくみなく心に分別なく（乙は「なき」は又兵六が持前、定て皆々（二字、乙になし）御存のはづなれば、いづれも腹立を止められ、吉野に化けたるを見て麓の人のいましめとなされ、狐の肉の

よき所は御取りなされ、又へ乙にはなしへあしき所は御捨なされて、塩の差引味噌の加減、各の御心次第になされたるがよろしくへ乙は「よし」、少しにても御腹中にかなひ、むまき味ひも間々これあるなどと御賞美に預り、痲瘡夜起の取着にもてはやされ、粥をす、むる一助ともならば、わが身のたのしみ此上なき仕合へ以下、約二一〇字分を省略へ飯は何とか奈良茶漬、塩梅よろしく御願申。刀も早く御渡しなされと、少しも憚る所なく、旁に進んで言ひだせばへ乙は「進み出て演説すれば」へ

### 三 「甲類本」についての再考

「自序」と十七の章段の本文を細かく比較・考察した結果、毛利本は「⑨牛わく丸」と「⑩狐二匹を捕える」の初め、及び「⑰兵六の帰還」の後半（あるいは「自序」も）は、後の補訂を含んでいるので、古い本文を純粹に伝えたものではなく、それらの部分の本文の古い形は新出の架蔵B本が伝えていると判断されるに至った。従って、前稿で毛利本を直ちに甲類本としたのは妥当ではなく、毛利本と架蔵B本を併せ考えて再建される修訂前の本文を甲類本とするのが正しいということになる。

毛利本は書き入れや貼紙・別紙による修訂を多数含んでおり、このような修訂を経て整えられたのが乙類本であろうと、前稿で推定したのは大筋において誤りではないが、長い伝来の過程で脱落・逸失などの事態が生じ、修復の作業の中で異なる本文が混入したのではないかと思われる。<sup>（注3）</sup>貼紙や別紙が該当する本文以外の場所に移っていることも多く、終わりの数丁には乱丁もあり、修訂案の書かれた別紙が誤って綴じ込まれたり、逸失した部分を他の本で補ったりしたこともあったかと推測される。

では、架蔵B本の前半の約三〇丁ほどが乙類本、残りの約三八丁ほどが甲類本の本文であることは、どう考えたら良

いだろうか。この問題を考えるに当たって注目すべきことが二つある。

一つは、「①二才たちの評定」の冒頭には「大石兵六夢物語」と内題があり、「②吉野狐の作戦会議」から「④重富一眼坊」までの各章段の冒頭には「一」と書いて章段の初めを明示しているが、「⑤茶屋女の抜け首」以下の章段の冒頭には何も書かず、代わりに「④重富一眼坊」以下の各章段の終わりに「此間絵有（あり）」または「夢物語二（三、四終）」と書いてあることである。三〇丁目は「④重富一眼坊」の中間に相当し、章段の切れ目の示し方の違いと本文の系統の変わり目とが重なっている。

いま一つは、毛利本の見せ消ち・傍書・書き入れ・貼紙・別紙などの修訂と本文との関係である。架蔵B本の初めの乙類本に近いとした部分では、修訂された形が本文となっていることを指摘した（二の②の③）が、後の毛利本に近いとした部分では、毛利本の修訂された形が乙類本の本文になることはあっても、架蔵B本の本文になることはない（二の⑤⑧⑬⑭参照）。ところが、④の「皮紙半紙百田の神〈毛の傍書は「紙」〉（毛のものとの本文は「尻のこい紙）」、⑤の「すきの不老豆なすびたちはけ」（毛のものとの本文は「是を聞くよりも）」、「最上川にはあらねども」の見せ消ち、以上の三か所は、修訂の形が架蔵B本の本文となっているのである。これも④⑤のあたりにテキストの問題があることを示している。

これらをもとに考えると、架蔵B本は、前半と後半とを異なる本によって書写したか、前半のみ修訂した段階の本を書写したか、前半を逸失し他の本で補った（または、補った本を書写した）か、そのいずれかということになる。いずれにしても混成本であり、誤写・誤脱もかなりあり、必ずしも善本とは言えないが、毛利本を補うところがあるという点において注目すべき本と見て良い。甲類本の系統の写本が更に見出だされるならば、「怡顔齋が持出せる所の大石こそ昔を返す言の葉とや言はん」と「自序」で称えた本（中神怡顔齋本）と甲類本との関係も含めて、新たに考える

ところもあろうかと期待される。

(注1) 『大石兵六夢物語』の写本(国語国文 薩摩路・38号 平成六年三月)

(注2) 前稿では、早稲田大学、日本大学(冊子仕立て。題箋は「兵六物語」)、セイカ食品(巻頭を欠く)の三本によって、『大石兵六夢物語』との関係を論じた。平成十年十一月の東京古書展の目録に新たな一本が出たが、現蔵者は不明。

(注3) ⑬の初めと⑭の後半とは隔たりがあるように見えるが、前述のように⑬の初めには乱丁(77丁は72丁の後にあるべきもの)があるので、現在の毛利本の配列で言えば、次に示すように、別紙綴じ込み以降が後の補訂を含んでいることになる。

72丁 ⑮の末尾。72ウは絵。

73・74丁 ⑯の途中(抜いてうしろに)から⑰の末尾まで。74ウは絵。

75丁 ⑱の冒頭から「折ふしに」まで。

\* 別紙 75丁をうける(ただし「折ふしに」は重複)。

\* 76丁 別紙の最後をうけ、78丁に続く。

\* 77丁 ⑲の冒頭部。「抜て後ろに」は重複しているが、73丁に続く。

\* 78・79丁 76丁の後をうけ、79オで物語の本文は終わる。79ウは空白。80丁から「自序」の本文がはじまる。

(注4) 毛利菊枝氏(正直から四代後の正彰氏の夫人。正彰氏の父上は麩城館本の奥付に「著者相続人」とある毛利元永氏)の談(平成元年一月二六日)によると、傷みがひどかったので、自分で裏打ちなどの補修をされたとのこと。また、借覧されることも多かったようであり、それ以前にも人の手が加えられたこともあったと思われる。